

現代英米演劇の研究

日比野 啓

2018年度は現代英米演劇についての単著や論集がほぼないかわり、紀要論文が大幅に増えた。紀要論文だから、と言うつもりはないが、めぼしいものは数少ない。もっとも、たしかに読んでいてこれほど唸られるものは数少なかったけれども、低め安定というべきか、どれもよく勉強した結果を形にして、読むこちらも勉強になったものが多かった。全てについて過不足なく言及することは紙面の関係上できないので、便宜上(1)狭い意味での作品論・作家論(2)文学や他国の演劇など隣接領域との相互関係に着目したもの(3)個別の作品・作家より社会状況・文脈を論じることに焦点があるもの、の三つに分けて、それぞれについて代表的なものとその意義を論じていきたい。

(1)狭い意味での作品論では、児嶋一男「1960年代後半のジョン・B・キーン作品を読む」(『獨協大学英語研究』第80号)が興味深かった。かつて現代アイルランド劇文学の旗手と目されながらも、今や忘れ去られた感のあるジョン・B・キーンの *The Field* (1965), *The Rain at the End of the Summer* (1967), *Big Maggie* (1969) の梗概と初演時の状況を説明し、ごく簡単な分析を加えただけの内容にもとより新味があるわけではない。けれどもただ淡々と梗概を綴ることが作品を理解することにつながるのだと言わんばかりの反時代的な著者の姿勢が、著者がキーンの作品を本当に面白いと思っていることが伝わってくる筆致と相まって妙に印象に残る。

大学・高専・研究所等が刊行する紀要論文の多くが電子化され、各機関のレポジトリに格納されるようになった昨今、学期末レポートや卒業論文を書こうとする学部学生はオンラインで手軽にアクセスできる紀要論文をまず手にするようになった。残念ながら、本論文が掲載されている『獨協大学英語研究』は電子化されていないのだが、学生を指導する教員からすると、素朴な記述の連なりで学生の理解を深めることのできる児嶋論文のような論文がオンライン紀要で入手できるようになればいっそう喜ばしい。

ところが、今回読んだオスカー・ワイルド、ユージン・オニール、ハロルド・ピンター、サム・シェパード、ポーラ・ヴォーゲル、スーザン・ロリ＝パークスらの作品を論じた論文の多くは、新奇性を盛り込もうと凝った知的な「仕掛け」をしてみるものの、結論はほぼ定説をなぞる、あるいは常識の範囲にとどまるものであり、学部学生は知的仕掛けゆえに内容を理解できず困惑し、院生にとっては、結論が凡庸でもそこに行き着くまでに知的な曲芸を幾つか披露すれば論文になるのだ、という誤解を生

回顧と展望

み出すものとなっている。ことに演劇作品についての論文は、小説ほど分量がないため、紙面が限られていても筋を全て語る事ができてしまう。小説や長編詩についての論文であれば、作品の幾つかの部分の切り出して自分の主張に合致するよう作品を組み立て直して提示することができるが、演劇作品についての論文では、梗概を語ることを通じて立ち現れてくる作品の全体性に抗うことが難しく、論文筆者の主張が些細なものだと梗概に埋もれてしまうし、壮大な主張だと論証が不十分だ、作品からかけ離れているという批判の対象となる。

ましてや外国文学・文化についての研究だと、埋もれていた史料を発掘して伝記的な新事実を見出し、それをもとにこれまでとは異なる見取り図を示す、ということもやりにくい。梗概をまとめ「作品解題」をすることに甘んじるか、これまでどんな論じられかたをしてきたかについてまとめ、それについて論評するメタ批評しか手がなくなる。

(2) 凡庸さの謗りを引き受け、情報を収集し手際よく整理してみせることに徹することができなければ、狭い意味での作品論・作家論は諦めるしかない。その意味で『アメリカ演劇』第30号が「ジャンルを超えるアメリカ演劇特集Ⅰ」と題してヘンリー・ジェイムズとウィリアム・フォークナーの戯曲あるいは演劇性について特集を組んでいたのは興味深かった。第七回アメリカ演劇学会(2017年8月30日・広島経済大学)におけるシンポジウムがもともになったもので、他にもこのシンポジウムをもとにしたものに齊藤園子「喜劇のアメリカ人——ヘンリー・ジェイムズの『アメリカ人』の小説と戯曲をめぐるトランスナショナルな葛藤」(『北九州市立大学外国語学部紀要』149)がある。

小説家の書く戯曲は大抵失敗作であり、とくに英語圏の小説家では劇作家としても成功したのはゴールズワージーやベケットほか数えるほどしかない(サマセット・モームは劇作家を廃業して小説家になったし、ワイルドで長編小説と呼べるものは『ドリアン・グレイの肖像』だけだ)。だが演劇の強固な制度に縛られていない小説家は往々にして演劇の制度の自明性を疑い、それを突き崩す作品を生み出すことがある。その意味で『アメリカ演劇』の特集は大変意義のあるものだし、「編集後記」で岡本太助氏が書くようにぜひ「今後も第二弾、第三弾を企画」していつていただきたい。この「回顧と展望」を書いている2019年暮れにはテアトル・エコーがマーク・トウェインの戯曲 *Is He Dead?* を上演しており、研究が後追いになっているからだ。ヘンリー・ジェイムズとほぼ同時代人のウィリアム・ディーン・ハウエルズもジェイムズと同じぐらい多く戯曲を書いたし、数でいえばブラ・ニール・ハーストンもそうだ。これにジェイムズ・ボールドウィンやカーソン・マッカーズなども含めればアメリカの小説家だけでも長大なリストになる。

もちろん、本特集でも(1)で述べたような作品解題でしかない、という論文が大半

現代英米演劇の研究

を占めているが、こちらが知らないことが多い分、教えられることも多かった。そうした中で、文字どおり群を抜いていたのは山本裕子「フォークナーのドラマトゥルギー——『操り人形』から『尼僧への鎮魂歌』」で、『尼僧への鎮魂歌』を上演不可能にさせている前衛的「複雑なジャンル横断形式」がすでに『操り人形』で試みられていたこと、そして「総合芸術作品に近づくための表現様式」としての戯曲を断念したところに「後期様式への移行」が準備された、という主張を説得的に展開し、すぐれた作品論・作家論となっている。

これ以外では、アメリカ演劇どころかアメリカ文学の専門家でもない研究者による「越境」もあった。荒木純子「アーサー・ミラーと「魔女狩り」——『るつぼ』の世界」(学習院大学人文科学研究所『人文』16)はアメリカ史研究者がピューリタン研究史とりわけセーラムの魔女狩りについての研究の展開について概略しており、とりたてて鋭い指摘はないものの『るつぼ』研究に役に立ちそうだ。ゲーテの翻訳者として名高いドイツ文学者・高橋義人による「オペラ・ブッフからアメリカのミュージカルへ——『メリー・ウィドウ』とロジャースとハマースタイン2世」(『平安女学院大学研究年報』19)は高齢になっても新しい分野に挑戦し続けるその意気やよしだが、残念ながら内容は内村直也『ミュージカル』(音楽之友社, 1958年)や南川貞治『ミュージカル』(朝日出版社, 1973年)あたりから全く進歩していない。もちろん、ミュージカルの歴史についての最低限のあるいは半世紀以上前の研究水準が一般市民はおろか研究者間でも共有されていないという点についてはアメリカ演劇研究者の一人として真剣に反省しなければならない。

戸谷陽子「The “Jolly Jap”——1860年代米国パフォーマンス空間における日本人ストックキャラクターの形成」(日本英文学会『英文学研究 支部統合号』11)は、1860年代の minstrel や vaudeville で日本人のストック・キャラクターが形成されていった様子を丹念に追っていて興味深い。ただし、「欧米の一般聴衆が実際に日本人の演じる演劇の舞台を見るのは川上音二郎」らが1899年から1900年にかけて欧米公演を行ったのが最初であると書きつつ、1866年には日本の旅回りの軽業曲芸団が欧米の劇場や博覧会を巡業した、と書いているのは解せない。言うまでもなく、川上音二郎が欧米人に見せたショーと、鉄割福松一座がサンフランシスコで見せた軽業芸は見世物というその本質において大差なく、どちらも「演劇」とはいえない代物であるともいえるし、どちらも立派な上演芸能だともいえる。ましてや長らく「演劇」の域外に置かれていた minstrel や vaudeville を扱い、論題にも「パフォーマンス空間」が入るのだから、なおさら「演劇の舞台」という言葉遣いは不用意ではなかったか。なお参考文献に故・三原文氏の名著『日本人登場——西洋劇場で演じられた江戸の見世物』(松柏社, 2008年)がなぜかないが、鉄割福松一座・濱淀定吉一座というそれまでの先行研究が明らかにした二座以外に松井源水一座・鳥瀧小三吉一座をはじめ少なくとも

八座が渡米していたこと、メトロポリタン劇場で上演された「日本人をつかまえろ」はクリスマス・パントマイムの茶番劇であったことなど、本論文の内容にも重要な影響を与えたはずの指摘がされているのに残念である。

石井康夫“Considerations of the Influence of Jean Racine on Samuel Beckett's Plays”（『麻布大学雑誌』29）はベケットがラシーヌを愛好しており大学で講義もしたというノウルズの評伝にある記述をヒントにして、『ペレニス』をはじめとするラシーヌ劇の“Non-vivid development leading to undramatic development, monologic [sic] lines, repetitive structure, preordained destiny”といった要素が *Happy Days* や *Play* を可能にしたと論じるもので、こちらも大胆な分野の越境を試みている。ただしノウルズが“the short monologues of the 1970s”のみへの影響を見ているのは、（評伝だということもあるだろうが）言えるのはせいぜいそこまでと線を引いたからで、韻文で書かれ朗唱法を前提としたラシーヌ作品がベケット後期作品と似ていると主張するのは相当無理がある。ベケットはフランス語で読んでいるはずなのに、本論文ではラシーヌの引用が英訳のみで原語にあたったふしがないのも気になった（英訳題名は *Andromache* とするものが多いので、本文での表記がそうなるのはいいとして、ラシーヌの戯曲は *Andromaque* であることに一度も言及がなく、ノウルズを引用する際も *Andromache* と表記を変更してしまっている）。越境をするには関連分野について十分通じていないと難しいことを痛感させられる。

(3) したがって作品や作家を通じて社会状況・文脈を論じるものに比較的すぐれた論文が出てくるのは必然と言える。川島健「福祉政策下の男性性——『怒りを込めて振り返れ』とマザリング」（同志社大学英文学会『主流』80）は、「福祉政策時代における男性性と母性という観点から…『怒りを込めて振り返れ (*Look Back in Anger*)』（1956）を再読する試み」であり、「その露骨なセクシズムが批判の絶えない」本作において実は「ジミーの男性性は一貫性を欠き、揺らぎ続けている」のだが、それは戦後英国の福祉国家体制の整備の時代において「国家が家族生活に介入し、福祉が拡大された母性として想像されている」こと、家庭内のケアをする母性とその後方支援を行う政策の力を合わせた「マザリング」が前景化されることで父親の役割がそのサポートに限定されてきた結果であると論じる。明快な主張と相当量の勉強が反映された綿密な見取り図を示されると、あとは「公式」に当てはめて解いていくだけではないかと構えてしまうが、川島は「格差婚」「不倫劇」「母親たちを巡る物語」「ジミーの獣性と女たちの順応性」「オズボーンがこだわった台詞の発声法」と本作品を読むキーワードを次から次へと出してきて飽きさせない。こんなに質の高いものが紀要論文でよいものかとすら思うが、それも上述したように学部学生が『怒りを込めて振り返れ』について論文を書こうと思って最初に手を取るのがこれであれば、幸福な出会いをすることになるはずだ。

現代英米演劇の研究

なお、川島は「若者、ジャズ、社会主義——『怒りを込めて振り返れ』の1950年代」（『同志社大学英語英文学研究』99）「ケネス・タイナンと感情の共同体——ニューレフト勃興期の英国演劇」（『同志社大学英語英文学研究』100）という同一のテーマについての二本の論文を発表しており、「福祉政策下の男性性」ほどは知的興奮はかき立てられないものの、高い水準を示している。とくに後者はオズボーンを激賞した批評家タイナンの価値基準が「生に向かう態度」「本能的な左翼性」であったことを示し、その時代的・状況的限界を鋭く指摘していて興味深かった。

川島論文が小回りのきく小型スポーツカーで歴史という曲がりくねった道をスイスイと行くようなものだとすれば、大谷伴子「戦間期英国演劇と「郊外家庭劇」：ドゥディ・スミスとはだれだったのか？」（『KYORITSU REVIEW』47）は大型トレーラーで多くの情報を積載しながらズンズン走っていくような感がある。「戦間期における独特な現象の一つ」として捉えられてきた「郊外家庭劇」というジャンルを「現在の英国演劇研究でも文学・文化研究でもまったく評価されない」ドゥディ・スミスの『サーヴィス』（1932）——とりわけ作品内で表象された「老舗のデパートメント・ストア vs 郊外から地方都市へと拡張する新興商店」という二項対立——を読み解くことで「大英帝国のマナーとパワーと共存・競合しいずれ取って代わることになる消費の帝国アメリカをめぐるナショナルならびにローカル／グローバルな地政学的関係」をそこに見出そうというもののだが、結論部分で急に話が大きくなりすぎて説得力を欠くように思われた。

大谷論文、川島論文と並べて鈴木美穂「現代イギリス演劇におけるポストドラマ演劇理論の受容——テキストの可能性をめぐって」（日本演劇学会紀要『演劇学論集』67）を読むと第一次世界大戦後から現在までの約一世紀にわたるイギリス演劇史と社会状況の関わりが窺われて興味深い。紀要全体の特集として「ポストドラマ演劇「研究」の現在」が掲げられ、ハンス＝ティース・レーマン『ポストドラマ演劇』（1999）の記述と各国演劇の現状を照らし合わせるという「縛り」がある上に、「イギリス演劇の研究者たちはポストドラマ演劇の概念に批判的」なのだから、書き上げる苦勞が偲ばれる。鈴木は『ポストドラマ演劇』の記述を丁寧につくいとつつイギリス現代演劇でポストドラマ演劇の問題意識を共有していると思われる作品を紹介し、さらに「観客の機能を理論化しようとする志向性はほとんど見られない」等の『ポストドラマ演劇』の問題を鋭く指摘しており、知的な誠実さと異質のものをまとめる巧みな手腕には感心した。

大幅に字数が超過してしまった。だがこれだけ言葉数を費やしても、全部を紹介することはできなかった。読者諸兄姉のご海容を乞うとともに、これだけの本数の論文が現代英米演劇の研究で書かれていることを素直に喜びたい。（成蹊大学教授）